

▶ 創価学会に注目した大物経済人

かつて高^{たかさき}崎達之助という人物がいました。日本と中国が国交回復する以前、周恩来から篤い信頼を得ていた人です。高崎は戦前の旧満洲時代、満洲重工業開発株式会社の総裁として活躍し、敗戦後は、日本人の引き揚げにも大いに力を尽くしました。そして戦後は、鳩山内閣の時に経済審議庁長官として入閣し、1955年のインドネシアのジャカルタで開かれたアジアアフリカ会議に日本の政府代表として参加、新中国になって初めての国際会議に参加した周恩来と会談を行いました。

日本の敗戦後、周恩来が初めて日本の政界の大物と会談したのです。高崎は「私は、共産主義は嫌いだ、中国も資本主義でいくべきだ」と率直に語るような人物です。しかし、周恩来は高崎に好感を持ったようです。高崎の「ともかくお互いに貿易をしよう」ということで周恩来と意見の一致を見ました。

そして出来上がったのがLT貿易協定でした。Lは周恩来の片腕だった廖承志の頭文字、Tは高崎達之助の頭文字です。そして東京にLT貿易事務所が設けられました。そのLT貿易東京事務所は、国交回復前のいわば中国大使館のような役割をも担っていたのです。

周恩来は、高崎を経営者としても非常に高く評価していました。ある時などは、訪中した高崎を、かつて、高崎が指揮をとっていた旧満州の工場に案内し、高崎にアドバイスを求めました。

高崎は適切なアドバイスをし、すぐそれは生かされました。その高崎はかつて東京の信濃町に住んでいました。信濃町は創価学会の本部がある場所です。今でもJR「信濃町」駅を降りると、創価学会のいろんな建物がいくつも建っています。

1950年代から60年代にかけて創価学会は急

速に成長し、会員を増やしました。しかし一部にやや強引な布教活動があり、知識人から、創価学会は批判的に見られていました。

しかし高崎には信濃町の学会本部にやってくる学会員たちが非常に真面目な人たちであると見えました。高崎はある時、周恩来に、「学会員には一般庶民が多く、平和問題にも熱心です。日中間の民間交流、そして将来の国家間の関係改善を目指すうえで、この勢力を無視することはできません。中国は創価学会と交流すべきです」と話したようです。(西園寺一晃著『周恩来と池田大作の一期一会』潮出版社)

▶ 有吉佐和子の周恩来への進言

有吉佐和子は1961年、亀井勝一郎を団長とする日本作家代表団の一員として訪中しました。私は改めて、その座談の時に通訳をし、現在上海に在住している周斌さん(著書『私は中国の指導者の通訳だった—中日外交 最後の証言』加藤千洋・鹿雪瑩訳、岩波書店)に電話で、その時の状況を聞いてみました。

周恩来は、日本の客人たちを気遣うように、団員たちそれぞれに話しかけます。有吉はその時、このような話をしたのです。「最近の日本ではいろんな宗教団体が活躍しています。その一つである

創価学会は今急速に成長しています。その主体である構成員は真面目な勤労大衆です。中国は日中友好団体ばかりでなく、創価学会のような大衆団体となんらかの形で交流を始めたらいいのではないのでしょうか」と進言したのです。その後、周恩来は対日業務に携わっていた孫平化に、創価学会に接触するように指示を出しました。

LT貿易東京事務所の代表に就いたのは孫平化です。孫は1917年、遼寧省蓋平県生まれ、旧満洲時代に日本に留学、1939年東京工業大学付属予備

有吉佐和子が貢献した知られざる日中交流

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓(おおるいよしひろ)

混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義「私は人類の一員だ!」 VII

部に留学後、同大の応用化学科に進学しました。しかし、もっぱらマルクス主義を勉強していた孫は、日本の中国侵略に我慢ならず大学を中退して帰国し、地下に潜って革命運動に全精力を傾けます。

そして新中国建国後は、周恩来、廖承志の下で対日関係の第一線で働きます。ある時、周恩来総理から創価学会をどう思うかと聞かれました。当時、孫は日本共産党の影響もあり、創価学会を「軍事化した恐ろしい団体」だと見ていたようです。その言葉を聞いた周恩来は、「実体を見ないで軽々しく言うな」と孫を叱りました。孫自身が著した『中日友好随想録(上)―孫平化が記録する中日関係』(武吉次朗訳、日本経済新聞出版社)に、こう書いています。

「周総理から〈創価学会という、この無視できない社会勢力を重視し、積極的に関係を結ばなければならぬ〉との指示を受け、われわれはようやく創価学会との関係構築に乗り出した。当初はあまり進展がなかったが、1974年12月、池田氏の二度目の訪中の折に周総理が病を押して病院で一行と会見して以来、〈この無視できない社会勢力〉と中国の付き合いは一貫して深化・拡大を続けており、周総理の予言を裏付けている。総理の死後、彼らは周総理への尊敬や感謝、深い思慕の念をすべて鄧女史(注：周夫人の鄧穎超のこと)に寄せ、今に至るまで親しい交際を続けている。私は〈知り合うのが遅すぎた〉と一度ならず反省した。だが、遅すぎるということはない。彼らとの友情には、ほかを追い越す勢いがあるのだから」。

➤ 中国と創価学会の結びつき

周恩来は非常に目配りの利いた宰相です。創価学会という宗教団体が、しっかりと日本の土壌に根付いた庶民たちの団体であると認識していたのでしょう。文化大革命が起こる以前は、中国は日本共産党や日本社会党と緊密な関係を持っていました。しかし、両党の下にいた労働者はいわば組織された労働者たち、しかし、創価学会にいた庶民たちは、そういう組織に組み込まれていない人たちでした。周恩来は、創価学会の中に日本にお

ける新しい民衆運動の大きな流れを見ていたのだと思います。

有吉佐和子は以前から創価学会の若い人たちが真面目であると好感を持っていたようです。その後、有吉は1965年6月、創価学会会長の池田大作氏と会談し、池田氏が中国に関心を示していることを確認しました。そして1966年5月「主婦の友」誌で有吉は池田氏と対談を行いました。その時、有吉は池田氏に「周恩来総理からの伝言があります。ぜひ中国にいらしてください」という言葉を伝えたのです。

その後、有吉は学会幹部に、中国の代表と会うよう勧め、孫平化と光明日報記者の劉徳有(後に中国文化部副部長)と会談しましたが有吉も同席しました。中国と創価学会が初めて接触した時でした。

1968年9月、東京・両国の日大講堂で創価学会学生会部での大集会で、池田会長は、すみやかに日中が国交回復をすべきであると提言しました。当時は佐藤栄作内閣の時代で、アメリカに追随し中国敵視政策を取っていた頃です。

池田会長の発言は、朝日新聞の一面で取り上げられ、劉徳有氏は直ちに中国に池田氏の発言を打電しました。この発言以後、池田氏は右翼から脅迫されたと言われています。しかし、有吉によって少なからず築かれた中国と創価学会との関係は、その後の公明党訪中(1971年7月)につながり、そして田中角栄首相の訪中、日中国交回復へとつながって行ったのです。その意味で有吉佐和子は、日中国交回復に知られざる貢献をしていたのです。

有吉は国交正常化後も訪中し、人民公社に入り日本人としては稀有な体験をしました。それは『有吉佐和子の中国レポート』に纏められ、当時の中国を知る貴重な資料になっています。(次号に続く)

* 本稿は、周斌氏の他に、加藤千洋・同志社大学大学院教授、西園寺一晃・工学院大学孔子学院院長、遠藤勝男・公明党元葛飾区議の皆さんからも貴重なお話を伺い執筆しました。(敬称略・順不同)